中日新聞 200

（第3種郵便物認可）

學生之新聞（がくせいのしんぶん）

■第293号■

学生街ダンス（キャンパスの話題、600字）▽カレッジモード（お気に入りのカルチャー紹介、450字）▽活写！（学生生活をとらえた写真と短い説明）▽活動通信（サークル・学生団体紹介、450字）▽學生辞典（学生言葉の解説、250字）－などへの投稿をお待ちします。採用分には薄謝を贈ります。投稿には郵便番号、住所、氏名、年齢、学校名・学年（社会人の方は職業）、電話番号・メールアドレスを明記してください。

460-8511 中日新聞社会部教育班 Fax:052(221)0909 E-mail:youth@chunichi.co.jp

各地の大学で相次いで入学式が開かれ、新１年生たちは新たな学舎で始まる勉学や学生生活に期待を膨らませた。そんな新入生らに各大学の学長はどんなメッセージを贈ったのか。名古屋大、岐阜大、三重大、豊橋技術科学大の入学式での学長式辞要旨を紹介する。

各地の大学で入学式

未来の担い手へエール

岐阜大

黒木　登志夫学長

読書で真の教養を

法人化四年目の岐阜大の理念は「学び、究め、貢献する大学」だ。二〇〇六年六月一日の創立記念日に「学生憲章」を設けた。「本をたくさん読み、学ぶ上での土壌を作ろう」など学生に期待する七カ条からなる。

背伸びをしてでもより困難な本に挑戦し、少しでも自分を成長させるような本を読んでほしい。真の教養は本を読むことでつくられる。

また、日本語の表現力と読解力は社会に出てからも建設的な議論などの基礎となる。国際語の英語をマスターするにも日本語の能力が必要だ。

長い人生を生きるための体力をつけ健康を守る習慣を身につけてほしい。生涯続けられるようなスポーツを探し、たばこは吸わないでほしい。

大リーグのイチロー選手は「自分自身が何をしたいかを忘れてはいけない」と言っている。大学に何のために入ってきたのか、忘れないでほしい。考える労力を惜しむと前へ進むことをやめてしまうことになる。常に考えることが前に進むためには必要なことだ。キャンパス生活も楽しんでください。

名古屋大

平野　真一学長

国内外のリーダーに

皆さんは、はつらつとした気分で、高い志を持ち、胸躍らせてこの時を迎えられただろう。この気持ちを大切にしてほしい。

名大は総合大学としての特長を生かし、人間性と科学の調和的発展を視野に入れた高度な教育と研究を行っているみなさんが誇れる大学だ。豊かな人間性を持つ国内外での指導的役割を担うリーダーとしての素養を身につけてもらいたい。

人生の道は、自分で切り開いていくものだ。いつまでもくよくよして、自分探しと称して逃避しないでもらいたい。自己を確立すること、置かれている場で最大限の努力をすることが先決だ。

われわれはグローバリゼーションの中で、存在を示さなければならない。世界に通じる人間性と基礎学力に加えて、自分の考えで議論できる総合力を身につけてほしい。と同時に世界で日本で何が起こっているかに鋭い目を向けてほしい。

最後に、私の好きな論語の中から一文を紹介して、皆さんの成長を期待する。

「学びて思わざれば、則（すなわ）ち罔（くらし）し思いて学ばざれば、則（すなわ）ち殆（あや）うし」

三重大

豊田　長康学長

明確な目標を持て

三重大学は、地域への貢献をしつつ、世界に通用する人材育成と特色のある研究成果をあげようとしている。

皆さんに実行していただきたいのは、目標と目標に向かって学習する場。今日帰ったら、早速一年間の目標を文章で書いてほしい。次は計画を立て、実行し、どれだけ達成できたかを自己評価し、次の改善に結びつける。成長する上で欠かせない基本だ。三重大は皆さんが自ら向上する努力を支援する。

学生自身が能動的・主体的にしてほしいということ。大学は学生自身が能動的・主体的に学習する場。今日帰ったら、早速一年間の目標を文章で書いてほしい。次は計画を立て、実行し、どれだけ達成できたかを自己評価し、次の改善に結びつける。成長する上で欠かせない基本だ。三重大は皆さんが自ら向上する努力を支援する。

地域の文化や歴史にも触れてほしい。津市や伊賀市を中心とする藤堂藩の初代藩主藤堂高虎を紹介する。高虎が成功した理由に、単なる武術のスペシャリストにとどまらず、築城技術など幅広い知識や技術、人間力や経営力を身につけて自己変革を成し遂げたことがあげられる。現代にも参考になる言葉を残している。次の言葉を紹介する。

「常に良き友と話し、異見をも請け申すべく候。人の善悪は友によると聞こへ候」。在学中には良き友との出会いを大切にしてほしいと思う。

豊橋技術科学大

西永　頌（たう）学長

技術者の役割大きい

諸君が活躍する二十一世紀は、世界規模で政治、経済、産業、学問が展開されるグローバル時代である。深刻になっている地球温暖化のように、あらゆることが国境を越えて関係し合っている。

アジアの成長と地球環境保全を両立する上で、技術者が果たす役割は非常に大きい。自然エネルギーの開拓や二酸化炭素を排出しない動力源の開発なくして、高い文化的生活は享受できない。日本では加えて高齢化社会への対応が求められており、介護機器や医療機器の研究においても技術者の絶え間ない努力が不可欠だ。

高度な専門領域に挑戦するためには、基礎学力を身につけていることが求められる。人生に置き換えると、悔いのない人生を送るには教養を身につけている必要がある。教養は自ら学ぶもの。講義だけでなく、読書や友人、先輩との語り合いの中で形成される。貪欲（どんよく）にその機会を求めてもらいたい。

本学で十分な基礎学力と先端的な技術を身につけ、グローバル時代に活躍できる人材になってくれることを期待する。

活写！

Photo by 山田加奈（二）＝名古屋外国語大今春卒業　大学の吹奏楽仲間と一緒に、トロンボーンアンサンブルで卒業ぎりぎりまで活動しました。グループ名は、七色の虹、「レインボーン」です。

国立大学法人の運営交付金配分ルールの見直しなどを盛り込んだ経済財政諮問会議の民間議員提案が、国立大学などに波紋を広げている。民間議員の一人、伊藤隆敏東京大教授に寄稿してもらった。

経済財政諮問会議民間議員
伊藤　隆敏

国立大の運営交付金　分配見直し提案

競争促進へ「選択と集中」

教育

「成長力強化のための大学・大学院改革について」と題した私たちの提案が一部では、国立大学の固定費である運営交付金の支給額を研究提案の内容で決定する提案と受け止められ、反発を招いているようだが、そういう意図は全くない。

全体が地盤沈下

現行の運営交付金配分ルールは、二〇一〇年まで、すべての国立大学の交付金が一律に毎年一％ずつ減らされる。このルールを変えることはない。焦点は一〇年以降も本当に今のような一律削減でいいのか、という問題提起なのだ。

創意工夫をあまり評価しない一律削減の原則を続けていけば、国立大学全体が地盤沈下するのは明白だ。世界的に「中の上」はあっても「上」はないという日本の大学の傾向が強まるだろう。

私たちの提案は、あくまでも「国際化や教育実績など」について、大学の努力と成果を評価し、努力した大学には手厚く交付金を配るというものだ。競争的資金による研究評価とは切り離して考えている。

提案内容を確認しておきたい。提案は①イノベーション拠点として――研究予算の選択と集中を②オープンな教育システムの拠点として――「大学・大学院グローバル化プラン（仮称）」の策定③大学の努力と成果に応じた国立大学運営交付金の配分ルール――の三本柱からなる。

①は、科学研究費の配分の問題だ。優れた研究を生むために、評価を厳密に行う一方、高い評価を得た研究に継続的に予算が集中的に投下され、競争的資金部分を増額する仕組みの充実を提案したもので、あまり異論はないはずだ。若手や初回の申請者に限っては、名前や経歴を伏せるマスキング審査もありうる。

入試日の分散化

②には「文系・理系の区分の撤廃」「入試日の分散化と九月入学の実現」などを盛り込んだ。

「文系・理系の撤廃」とは、具体的には学部や学科に細分化された入学試験をやめることだ。今のように十八歳で専攻を決めるのは早過ぎる。一年ないし二年、昔でいう教養課程で学ばせ、学生の履修科目、成績や興味を基準に専攻を決める。

多くの学生は最先端の領域に進もうとするから、選択競争が激しくなり、勉強するようになる。最初から狭い専攻を決めていないため、例えば金融工学や環境工学、医療経済学といった融合領域の勉強がしやすくなる。定員割れの学部も生じ、競争倍率を見ればどの学部が人気かが一目瞭然（りょうぜん）になるため、教育する側にも競争圧力が働いて、大学教育の質向上につながる。

「入試日の分散化」は、実現したいテーマだ。現行の国立大学入試は、前期試験と後期試験があるものの、後期を受験できるのは前期の不合格者か辞退者だけ。入試問題の構成も違う。事実上、チャンスは一回で、入試日を統一するのは、国立大学のカルテル行為のようなものだ。浪人は人材のミスアロケーション（誤った配分）である。

受験機会を広げ、国立大学の複数受験・複数合格を認めることで、受験生の負担が大学を選ぶ方式に改めてはどうか。一期校・二期校の時代があったが、五期校や六期校の態勢にするのだ。そうすれば、私立同様に合格者の歩留まりを高める競争が一気に始まる。教育の評価が低いと、学生がまともに集まらないから、本気で教育改革に取り組まざるを得なくなる。受験生の勉強法や入試の出題にも好影響が出るだろう。

努力と成果を評価／一律削減に疑問

国大協は反発

③は、国立大学協会などが最も反発している項目だ。提案の背景には米国の州立大学での経験がある。州立大学の予算は、州の財政状況に左右される。州財政が厳しくなり予算が大幅にカットされると、大学は一番弱い学部を廃止して事態を乗り切る。学内予算の一律削減は最も愚かな方法で、優秀な教授、優れた学部の教授から順に他大学に移ってしまう。[illegible]

沈下がおきる。

運営交付金は現行の一律削減方式の無期限延長で、本当によいのか。国立大学は本当に全都道府県にひとつ必要なのか。個人的には大学間の合併がおきても良いと思うが、そうした点も含めて議論を喚起したい。

米国では、学部教育ではハーバード大学がナンバーワンだと思わない人も多い。研究重視型、教育重視型など、いくつかのタイプに大学が分化しているからだ。だが、こうした機能分化が日本ではない。みんなが同じことをやろうとして、みんなが同じひずみを抱えたまま沈んでいく。これでは、教育も研究も教員も学生もだめになる。

努力した大学に「選択と集中」を促すような交付金制度にすることで、大学は一番弱い学部を閉じ、国は成果をださない大学への交付金を大幅削減する。[illegible]

体の教育水準、研究水準を競争を通じて強化することができる。

教育型と研究型の分離も進めるべきだ。東京大学は本郷で世界の研究者に開かれた大学院だけになり、駒場が四年制の主に学部教育重視大学として独立するというのも、モデルの一つとしてあり得る。さらに、駒場で理科系の専攻ときまった学生のうち成績が良い学生は、三―四年は本郷（または他の研究大学）で実験に従事して（単位認定のうえ）卒業、という連携もありうる。

今回提案は、「成長力強化のために」とうたったように、良い大学、可能性のある大学をさらに良くする方策が基本だ。だが、トップクラスの競争力が高まれば、ほかの大学にも圧力がかかり、日本の大学全体の水準が向上する。各方面での幅広い議論を期待したい。

進路の選択

きな差がでる。とはいえ競争率二十倍以上、難関であることは間違いない。私は彼女の顔を見るたびに、前者を選んで偉くなったほうがいいと口説き続けた。しかし彼女が選択したのは、地味なほうだった。

なぜキャリアを選ばなかったのかと、卒業式の後の謝恩会で、すぎない。とてもさわやかで、かっこいい。この会話を横で聞いていた同僚が、「賢明な選択だ」とつぶやいた。

宝物が巣立っていくのを見送る――教育機関で働く者の特権である。

（お茶の水女子大学教授　耳塚寛明）